

■小学校—学校という場所について—



Schools began with a man under a tree, who did not know he was a teacher, discussing his realization with a few who did not know they were students...  
the existence-will of school was there even before the circumstances of a man under a tree.

Louis I. Kahn

一本の樹の下で語り始めた人の話を聞きに人が集まる—それが学校の起源である

**学ぶための場所**

学校とはどうものだろうか。  
ルイスカーンは、学校のはじまりを上記のように記している。  
学校は、誰かと誰かが出会い、それによって、自分の知らないことを知っていく場である。

学校は、まちのような出会いの起きる場であってほしい。  
まちにはさまざまな出会いがひそんでいるから。

まちは学校である。

**こどものための場所**

子供のための場所は、変化に富んだ居場所であってほしい。

高いところ、低いところ。  
明るいところ、暗いところ。  
にぎやかなところ、静かなところ。  
みんなでいられるところ、ひとりになれるところ。  
・・・そんな場所の集積が、子供のための場所、学校であってほしい。

さまざまな居場所を持つ学校。

**地域のための場所**

学校は、地域の頼れる場である。

震災の時に、たくさんの方が学校へ向かったように、学校は、地域の磐石として存在する。

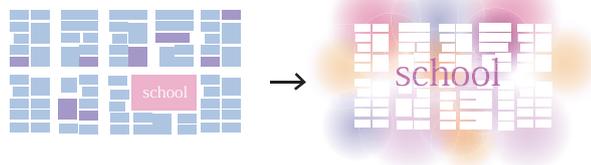
そのような、緊急事態の時だけでなく、常に地域の人々に使われ、地域の拠点となっていくような場所が小学校であってほしい。

子供たちが人生で初めて集団生活を行う場として与えられた小学校にこそ、地域コミュニティを形成していくヒントがあるのではないだろうか。

地方都市のような、閉じたコミュニティーのある場でもできる小学校地域の強いつながりのようなものが、都市部の、流動的なコミュニティーの中においても、何か違う形で人と人のつながりを生む（それは、住まいの問題と関係してくるのかもしれないが、家族という単位が薄れる都市部で、家族とは違う、生活を支えていくための新たな人と人とのつながりが生まれる）場として、小学校があってほしい。

■まちの活動と一体となる小学校

まちの中は、学びの本質に満ちている。  
まちの中で起こる出会いこそが学びの本質であり、その出会いこそが学校の原点である。  
まちの中の1施設としての学校ではなく、まち全体が学校であるような、さまざまな出会いがおきる場を計画する。



小学校+区民センター+商業

■敷地：月島



商店街によりそう小学校

月島商店街沿いの、現在空き地の多い場所を敷地とする。

まちの活動がよく滲みだしてくる商店街は、子供たちにとって格好の学びの場になることだろう。

また、この敷地に現在建つ4つの商店を建て替え、施設のプログラムとして組み込むことで、小学校内に地域の人々が気軽に入ってこられるよう計画する。

また、敷地のが小さいため、大きなグラウンドや体育館をとることはできないが、近くの教育施設やスポーツ施設を借り、地域全体を使って学んでいく。



■プログラムの配置

小学校

1 学年 1 学級 CR×6  
音楽、理科、工作、図書、ランチルーム

1933 m<sup>2</sup>

+

区民センター

行政サービス出張所  
子育て支援室  
会議室・貸出室

2055 m<sup>2</sup>

+

商業

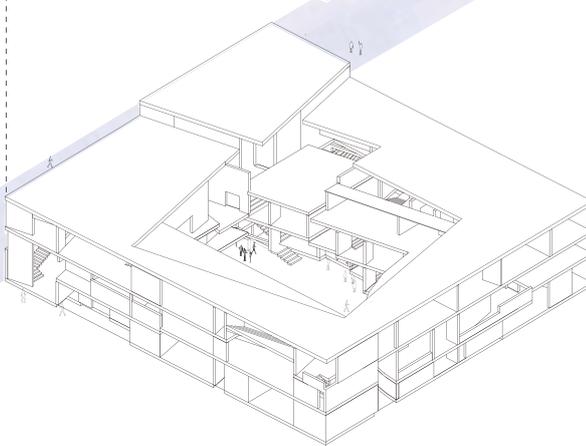
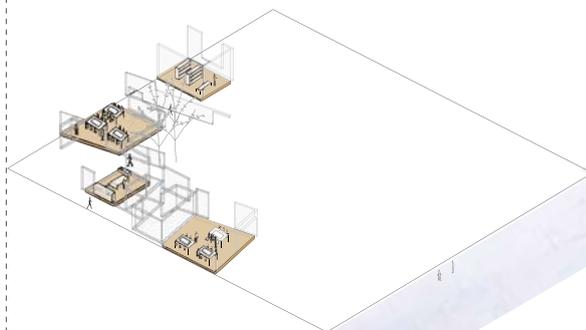
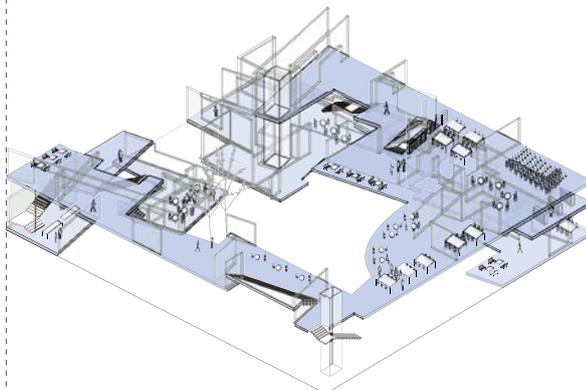
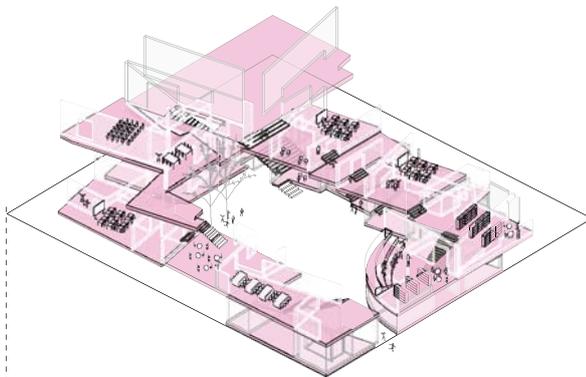
既存店舗を建てかえ もんじゃ焼 2 店舗  
文房具屋 1 店舗  
肉屋 1 店舗

もんじゃ振興会の中心施設誘致  
217 m<sup>2</sup>

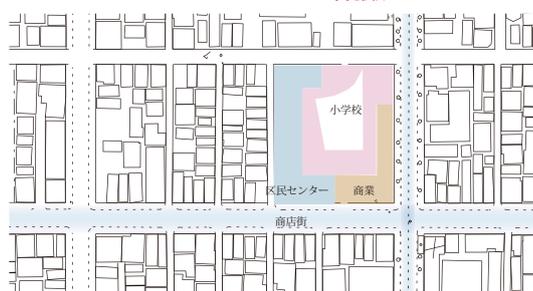
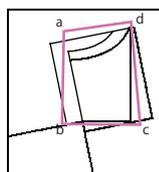
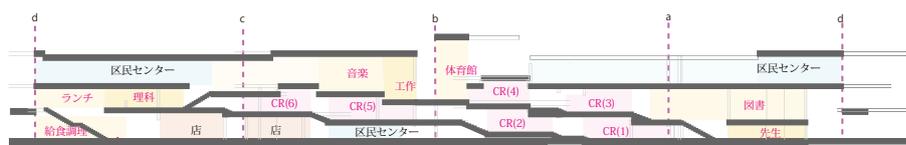
建築面積 1704 m<sup>2</sup>  
延床面積 4205 m<sup>2</sup>

敷地面積 2300 m<sup>2</sup>  
商業地域  
建蔽率 80%  
容積率 500%

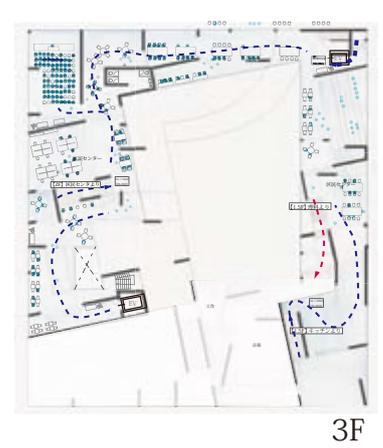
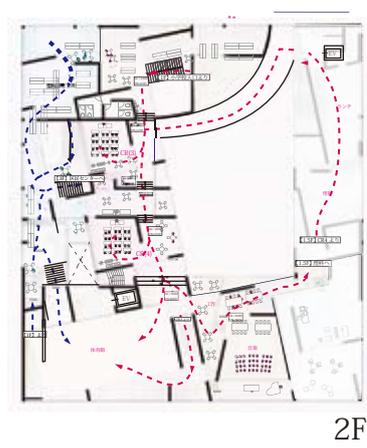
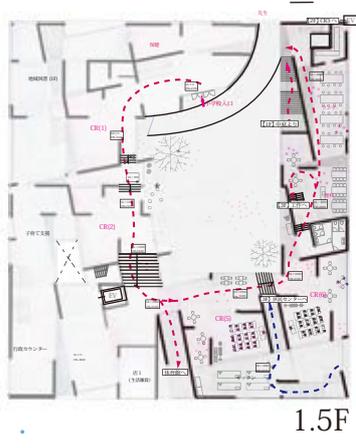
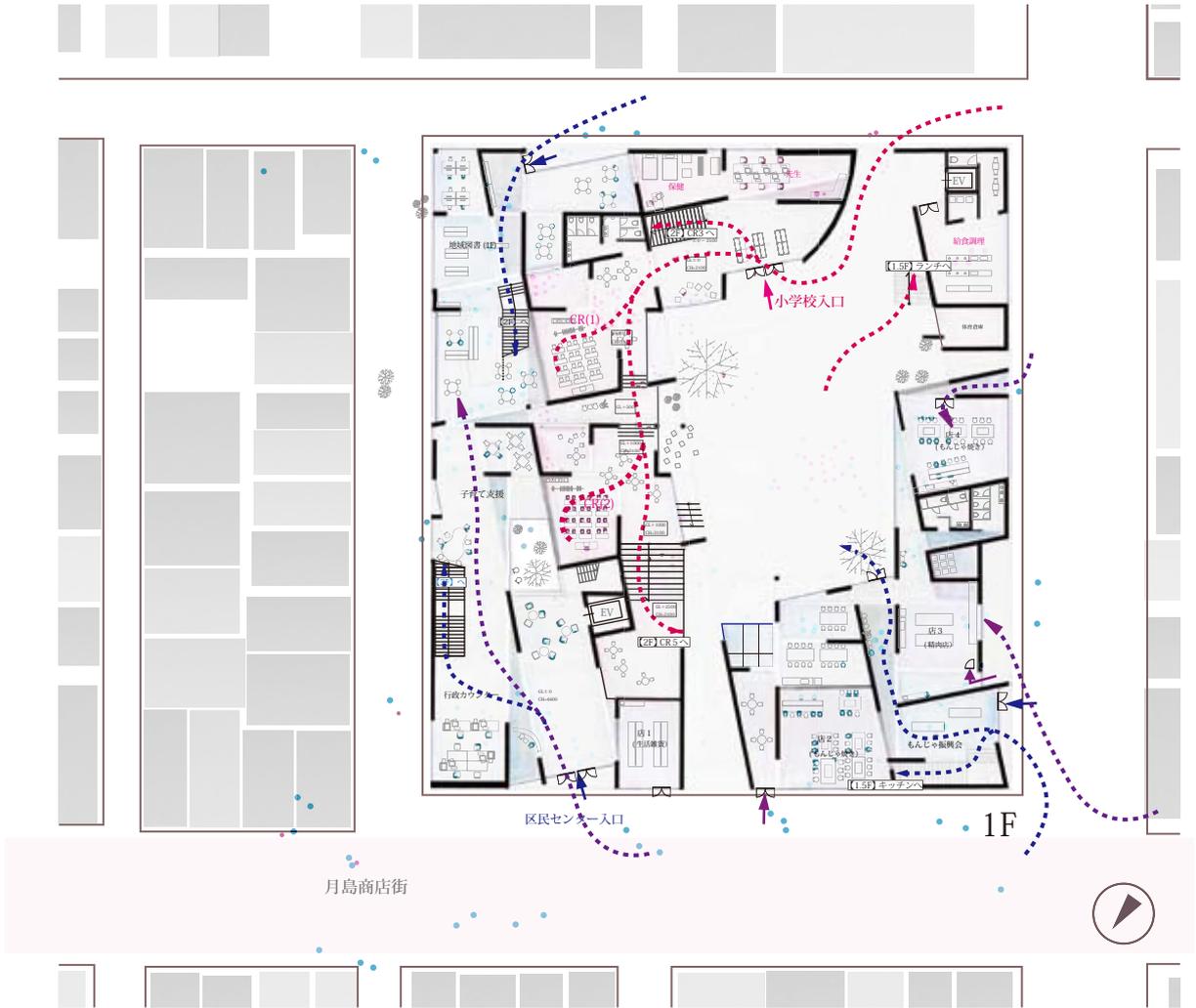
商店街



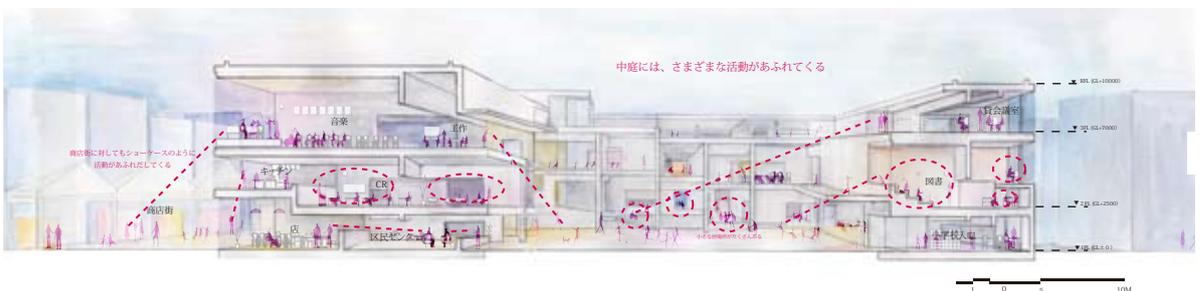
■導線計画



■配置図・平面図



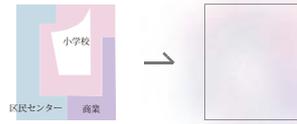
■断面図



## ■シーンと空間

### 重なる領域を生む場

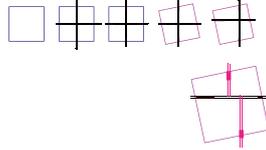
小学校、区民センター、商業と異なる用途の場が、どのように関係性を持つべきか。空間として完全にわかられるのではなく、柔軟に、お互いの関係を保ちながら一体感を生む。異なる用途の領域へも風景を広げ、多様な活動が見えてくる場を作っていく。



#### 1. ずれを使った場の構成

本計画では、小学校、区民センター、商業と異なる用途が互いに気配を感じながら、新たな出会いが生まれるような場所を、壁面の操作によってつくりだす。壁面の操作では、壁面の【ずらし】+高さの調節によって、空間が持つ領域が、重なり、他の場所での活動が見え、自分がある空間の外へと意識が広がっていくようなつながりを設計する。「流れ」と「たまり」をうみだす、ずれを伴う2つの壁面操作によって場所を作っていく。

操作①

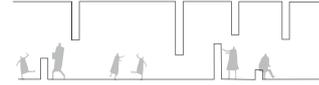


操作②

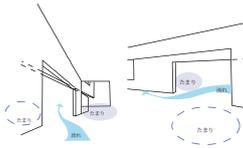


#### 2. 壁

私たちが認識する空間は、さまざまな領域によって切り取られている。壁、ガラス、天井の高さ、床の高さ……本計画では、主に、壁が人に認識させる領域を使って設計を進めていく。



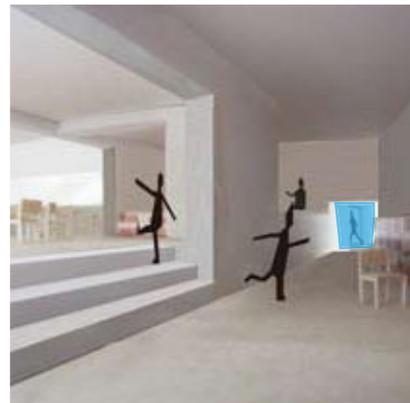
区民センター入口より入った時の2枚の壁のずれが作る流れとたまり。室として与えられる場ではなく、人の行為が誘発する場所のありかた。



a 区民センターより、地盤に集中する場であるCRの様子を直接見ることはできないが、こどもの遊び場である小さな場（〇で囲んだところ）のこどもの行為はすぐに目に入ってくるようになっている。  
b 小学校側から見ると、区民センターの行為が見え隠れするようになっている



a 区民センターより小学校を見る  
子供たちの遊び場が、区民センターから見える



b 小学校より区民センターを見る  
小学校から、区民センターの人の流れが見える

まちの活動と共に、子供たちはまなび、遊び、成長していく。  
この場所は、小学校ではなく、すべての人の学び場、まちのまなびや。